

# 新岡垣風土記

第435回

## 古文書で探る庶民の暮らし

### —唐津街道の道筋—

岡垣歴史文化研究会 羽山 健一

前号で江戸時代の唐津街道は、城山峠を通る道筋と紹介したが、『岡垣町史』近世編は、城山峠の西側450メートル程離れた碎石場付近の峠を越えたとしている。

その道筋は、赤間宿の追分(街道の分岐点)から福岡教育大学構内を通り、城山の山裾を進み、城山峠の500メートル程手前に到る。直進すれば城山峠であるが、ここを左折して坂を登り、小西碎石場付近の峠(郡境)を越えて岡垣町に入る。上畑区長谷の谷合を下り、麓の集落の東側の山裾を通り、矢矧川に到る。ここが、城山峠側の道路との合流点である。橋を渡れば海老津区の旧道に続くのである。

『岡垣町史』が唐津街道とするこの道路は、1887(明治20)年測量の5万分の1地形図に国道と表記されたのが初出で、1933(昭和8)年5月に拡張された城山峠と

接続する新道(現在の県道)に路線変更されるまで、国道として利用されていたのである。町史の説は、江戸時代の唐津街道が明治維新で国道と改称し、昭和8年まで継続運用されたことになるのである。

城山峠通行説は、伊能忠敬の測量成果の「大日本沿海輿地全図」と『測量日記』が有力な史料である。2002(平成14)年に城山峠付近で発見された遠賀郡の郡境石も重要史料である。

今回から唐津街道に関する新史料を紹介する。

福岡総合図書館の「長春軒文庫」所蔵文書に『順見使西国紀行』がある。著者は天保9年度の九州巡見使・大久保勘三郎である。同書によれば、1838(天保9)年閏4月朔日の朝、巡見使一行は芦屋宿を出発、糠塚、山田、海老津を経て上畑村に入る。同書は、「△笠

松村(上畑村の枝郷の由、家八二三軒有の三也、此辺石八山にそひ、左八畑也)、ぬか塚より笠松辺迄苗代の外八田毎に水を切たり、峠、笠松より次第二のほり行也、もじくち峠と云、峠の左の方に石の傍示杭二ツ並び立り、西遠賀郡東宗像郡と記有、傍に少く木にて、西上畑村抱、東武丸村抱と記有(注1)と記している。

唐津街道の道筋を左右する重要部分を要約する。峠の麓にある上畑村の枝郷笠松村の人家の前を通り、峠を登る。門司口峠と呼ばれる峠の左側に石の傍示(境界標)が二つ並んで立っていた。これは、遠賀郡と宗像郡の郡境石である。平成14年に発見された遠賀郡の郡境石と推定されるが、その正面に「従是東北遠賀郡」、裏面に「上畑村抱」と刻まれている。遠賀郡の郡境石の側の小木に上畑村抱と書かれ

ていた。宗像側も同様に武丸村抱と書かれていたのである。福岡藩では、伊能忠敬や巡見使が通行の時、村境に村名を書いた木杭を立てさせていたのである。

遠賀・宗像の郡境は、上畑村と武丸村の村境でもある。この2村が接する峠は、城山峠である。碎石場側の峠は、上畑村と宗像郡石丸村の村境である。巡見使は、唐津街道の城山峠を通行したのである。

門司口峠の門司口という地名は、門司方面に通じる村の出入口の意である。したがって、門司口峠は、宗像側の呼称である。城山峠の宗像側は、宗像市大字武丸字門司口である。赤間宿周辺の住民は、門司口と言えば城山峠と認識していたのである。

図版は、明治33年発行の5万分の1地形図である。

つづく



▲明治33年の地形図

注1 西南学院大学博物館研究紀要第4号に、森弘子氏・宮崎克則氏による『順見使西国紀行』の翻刻文が掲載されている。その一部を引用した。